様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５２０３４５
研究課題名（和文）　現代ドイツにおける集合的記憶の形成と文学の機能

研究課題名（英文）　The Formation of Collective Memory in the contemporary Germany and the Function of Literature

研究代表者
初見　基（HATSUMI MOTOI）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：９０１９８７７１

研究成果の概要（和文）：
本研究は，1980 年代半ば以降顕著に観察されるようになったドイツにおける「記憶文化」と呼ばれる事象を，単に現象を追って確認するだけでなく，より広い射程から考察することを目指したものである。本研究期間内の三年間においては，第一に，「記憶」を論ずるにあたり前提となる考察を行ない，個人の記憶と集合的記憶，「死者の記憶」といった論点を整理した。また第二に，両大戦間期の思想・文化状況を第一次世界大戦の「戦後」と捉え，第二次世界大戦の「戦後」と併行して論じてゆく糸口を探った。また第三に，研究の前提となる資料を系統的に収集した。

研究成果の概要（英文）：
This research aims at considering the "memory culture" in contemporary Germany, which came to appear notably after the middle of the 1980s, from a larger range. In the first place within this research period, consideration which will be the requisite in discussing "memory" was performed, and points of argument, such as an individual's memory, collective memory and "memory of the dead", were arranged. To the second, the thought and the cultural situation in the 1920's-30's years were realized to be the "postwar period" of World War I, and a clue discussed in parallel to the "postwar period" of World War II was explored. Moreover, the data which will be the requisite for research were collected systematically.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：現代ドイツ，記憶文化，集合的記憶，戦後文化

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は，過去 20 年ばかり，世界の冷戦体制崩壊の崩壊前後，ドイツ史に即した言い方をすれば，「東ドイツ」国家が崩壊して「統一ドイツ」が成立して以降のドイツ文学の動向を，同時代的・同時並行的に追ってきた。その過程で，ドイツが国家・政治機構のうえでは「再統一」された 1990 年代以降，さらに旧西ドイツにおいてはそれを遡る 1980 年代半ばより，「記憶文化」と呼ばれる現象が顕著に出現しており，それが文学を含む文化活動に影響を与えると同時にまた，諸文化活動によって支えられる、というかたちで，緊密に連関している，この事実を，文学・文化研究者という立場からいかに位置づけ，そして評価するべきであるか，という問いに行き着いた。これが本研究を開始する際の第一の動機である。

第二の動機としては，本研究代表者は，かねてよりヴァルター・ベンヤミンの思想を研究しており，とりわけ晩年期における彼の「歴史認識」を巡る議論についてこれまで考察を重ねてきているが，その延長上で，「歴史認識」を「記憶」という論点と関連づけたうえで，これについてより詳細に理論的に検討する必要性を感じた，という点が挙げられる。そしてさらに，ベンヤミンの「死者の救済」という企てが，1980 年代半ば以降の「記憶文化」と外在的及び内在的につながっている様相を精密に確認してゆくことの重要性も，そこに加わる。

このふたつの問題意識を総合的に扱うかたちで，ドイツ同時代文学・文化の現象面を「記憶」という観点から特徴づけ分析してゆくとともに，それをより原理的，理論的に裏づける作業を同時に進めるべく，本研究課題が構想された。

また先行研究としては，ドイツ語圏では主として 1990 年頃より，ドイツ社会の「負の過去」との係わりを，「集合的記憶」概念をもとに，「文化的記憶」あるいは「コミュニケーション的記憶」といった概念によって積極的に捉えようとする試みが重ねられている。またフランスでは，1980 年代より「記憶の場」というかたちで「集合的記憶」のあり方についての研究が進められている。本研究のある側面も，それらの潮流からいくつかの示唆を得ている。

２．研究の目的

本研究は，3 年間という研究期間で計画されていた今回の研究課題の枠にとどまらない，より長期的な視野のもとに構想されている。そのおおきな骨子は以下のようなものとなる。

第一に，「記憶」一般をめぐる議論を，本研究遂行との関連で――とはすなわち，主として文化研究的な観点から――整理をして再定義を試み，現在進行中の文化現象に対する分析概念として適用可能なものにするべく努める。

第二に，1980 年代半ばから現在にまでつづいているドイツにおける「記憶文化」と呼びうる現象が，どのように成立してきたかを，歴史的に追い，客観的に跡づける。これによって同時に，ドイツの「戦後」という枠をより明快に位置づけることがもくろみられている。

第三に，そのような経緯において，政策面ばかりでなく，文学作品をはじめとする諸文化領域がそこにどのようなかたちで関与していったかを，具体例を個別に扱って確認してゆく。

第四に，「記憶文化」がことさらに強調されるようになるのは 1980 年代半ば以降に顕著な動向ではあるものの，しかしこれはそれまで積み重ねられてきた，第二次世界大戦後のいわゆる「過去の克服」の諸議論のなかでの「歴史認識」「記憶」をめぐるさまざまな考察の延長上に置いて考えることができる。そこで，これがどのようなかたちで展開されていったのか，その経緯をより具体的に確認してゆく。

第五に，さらにそれを踏まえつつ，1930 年代にドイツではヴァルター・ベンヤミンが「過去の救済」をはかる「歴史認識」というかたちで，またフランスでは社会学者のモーリス・アルヴァクスが「集合的記憶」論として，構想していた議論を，「第一次世界大戦」の「戦後状況」という，多数の「死者」たちと直面せざるをえない背景にあったからこそ成立しえたものである，という仮説の検証を進める。そしてそれを，「第二次世界大戦」の「戦後状況」と対比考察し，後者における文学と思想の未完の可能性を見いだしてゆく。

以上のようになる。

３．研究の方法

研究は，第一に，課題と関連する文化諸現象を観察して検討してゆくことと，第二に，理論的・原理的な考察，というふたつの面で進められた。

（１）文学作品・文化現象の観察

①本研究代表者の本来の領域である，ドイツ文学研究において，まずは西暦 1990 年以降，とりわけ 2010 年前後のドイツ文学作品において，「回想」「想起」といった観点が中心となっているものを極力網羅的に読み進めていった。また，それらがどのように受容され，いかなる議論を生んでいったかについて見きわめるための二次文献に関しても，研究書・研究論文や書評にとどめず，広範な雑誌・新聞記事などをも含めて，系統的に収集していった。

また，同時代文学を分析する前提として，第二次世界大戦後の「戦後文学」を，「回想」「想起」といった観点を導入することによって再検討してゆく作業を進めた。こちらについては，何人かの代表的な文学者の作品に即して，併行的なかたちでの考察が為されている。

②文学研究と並んで，まだ萌芽的段階ではあるが，「記念碑」等に象徴される空間表象において「記憶」の問題を扱う研究の端緒をつけた。ドイツにおいては，とりわけ 19 世紀以降の「ナショナリズム形成」を探求するうえで「記念碑研究」の分野については膨大な量の研究蓄積があるが，本研究ではそれらを踏まえつつ，20 世紀末から 21 世紀初頭にかけてという時代に制約されて現われた，その特殊形態である「警告記念碑」に焦点を絞り，そのいくつかをめぐって交わされた議論についての資料を収集した。ただこれも網羅的に見渡すのはほぼ不可能なほど広範にわたるため，とりあえずはそれがとくに集中して観察できるベルリンという都市に限定して進められている。

（２）理論的研究

「記憶」の理論をめぐっては，脳神経学などまで含めて，さまざまな分野で幅広い研究が多々行なわれてきており，そのすべてを含むかたちで理論形成することはほぼ不可能に近い。本研究では，自然科学分野における記憶研究なども極力参照しつつ，まずもっては文化領域で問題となる「集合的記憶」に限定したかたちで考察を進めている。ただこれは，既成の理論を文学テクスト理解に適用する，といった方法を採るのではなく，文学テクストを主とした文化領域に現われている現象を理論的に抽象化したならどのように整理できるか，といった関心によるものになる。

そしてそれを遂行するために，本研究期間のあいだでは，本研究にとっての先行研究となりうる二人の思想家の考察に限定した検討が行われた。

①本研究代表者は，30 年来ドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミンの思想と取り組んでいるが，本研究課題も，その流れのなかで一定の方向性を得ている。ベンヤミンは，叙事形式の考察，都市における幼年時代についての記憶の記述，そして近代ヨーロッパ文化批判，といった諸点を突き詰めてゆくなかでいわゆる「パサージュ論」を計画し，その晩年にはこの計画の「認識批判的序説」として著された「歴史の概念について」というテクストで彼独自の歴史構想が明らかにされていた。

本研究の枠内では，ベンヤミンの「歴史の概念について」を「集合的記憶」という，彼自身とくに積極的に主張していたわけではない観点から再検討・再構成するとともに，2010 年に刊行された新全集に収録された本テクストの異稿・準備稿類を改めて綿密に探査することで，それを補足することを目指した。

②「集合的記憶」という概念はそもそも，フランスの社会学者モーリス・アルヴァクスが積極的に唱えはじめたものである。本研究では，彼がどのような理論形成をしたかをまずは確認しつつも，社会学史的な立場からではなく，この思想が出てきたのが 1920-30 年代の「両大戦間期」，というよりもむしろ「第一次世界大戦」の「戦後」だった点に着目し，「戦後の思想」としてアルヴァクスを捉える視座を検討していった。それは「死者の記憶」をいかに形成するか，という点に収斂するものであって，そのかぎりで，ベンヤミンの歴史構想とも通底しているのではないか，この仮説に向けて，アルヴァクスの理論の再検討が為された。

４．研究成果

（１）文学作品・文化現象の観察

①戦後文学研究の一環として，イルゼ・アイヒンガーの散文作品を扱い，その作品において「記憶」がいかに捉えられ，そしてそれが作品内でどのように働いているかを検討し，「物語」化されないままに「記憶」の断面が露出するアイヒンガーの作品の特性を明らかにした。(論文⑨及び学会発表①)

また，「思い出す」ことを中心モティーフとしたベルトルト・ブレヒトの詩「後から生まれる者たちに」を中心素材として，ドイツ戦後社会において要請される「追想」するという行為が，文学にとって重要であると受け止められたにとどまらず，それがいわば「社会規範」として流通してゆく様相を確認した。

（論文④）
　さらに，同時代文学に関しては，目下のところは作品紹介という表層的段階にとどまっている。(論文⑤，及び③⑧)
②「警告記念碑」をめぐっては，諸資料を検討している段階であり，その成果は研究会において中間発表を行なっているが，まだ論文としてまとめるだけの状態にまでは達していない。ただ部分的には，「都市の記憶」を検討するなかでその成果は活かされている。（論文⑥）

（２）理論的研究
①ベンヤミンの「歴史の概念について」をその準備稿，異稿を中心に読解する作業はすでに一通り終えており，通常読まれるテクストからは見えてこない側面を主として扱った論文としている。(未発表）またそのための基礎となるベンヤミンの理論的枠組みを問い返す作業の成果として，「都市の記憶」をめぐって「記憶」のあり方を位置づける試みをした。(論文⑥)
　アルヴァクスを「戦後思想」と捉え返す作業は，いまだ継続中であり，論文としてまとめる状態ではない。
　ただ，ベンヤミン，アルヴァクスらの「両大戦間期」における「戦後思想」での「記憶」という論点を検討するなかから出された，「死者の記憶」という観点を，日本における「戦後意識」の変貌に即するかたちで素描的に記述した。(論文①)

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①初見基，死者の記憶，批評研究，査読無，2012，頁未定
②初見基，書評　関口裕昭著『パウル・ツェランとユダヤの傷—《間テクスト性》研究』，オーストリア文学，査読有，No.28，2012，pp.43-45
③初見基, ドイツ文学の現況と翻訳･研究 '09, 文藝年鑑 2010，査読無，2010，pp.84-87
④初見基，追想の要請—〈後から生まれる者たち〉に課された規範—，ドイツ文学論集，査読有，No. 31, 2010，pp.126-140
⑤初見基，記念の日々と文学—最近のドイツ文学から，DeLi，査読無，No.10，2010，pp.4-13
⑥初見基，都市の記憶　—〈パサージュ〉理解に向けて—, リュンコイス, 査読有, No. 43, 2010，pp.215-233
⑦初見基, 音楽のなかでの自己との出会い——エルンスト・ブロッホ『ユートピアの精神』より「音楽の哲学」におけるワーグナー理解, 年刊ワーグナー･フォーラム 2009, 査読有, 2009，pp.29-42
⑧初見基, ドイツ文学の現況と翻訳･研究 '08, 文藝年鑑 2009，査読無，2009，pp.84-87
⑨初見基, 想起の規範的な力に抗して——戦後文学のなかのイルゼ・アイヒンガー，日本独文学会叢書：災厄の想起と言語化—イルゼ・アイヒンガーと戦後文学のカノン，査読無，2009，pp. 4-18

〔学会発表〕（計１件）
①Motoi Hatsumi（初見基），Sterbensarten der/in der österreichschen Literatur，国際シンポジウム Sterbensarten der/in der österreichschen Literatur，2011 年 11 月 4 日，於日本大学文理学部

６．研究組織
(1)研究代表者
　初見　基（HATSUMI MOTOI）
　日本大学・文理学部・教授
　研究者番号：90198771

(2)研究分担者
　　な　し

(3)連携研究者
　　な　し